

## 「陸前高田市内における子どもの居場所づくり活動『みちくさルーム』の実施」事業

震災で失われた子どもの“居場所”を取り戻すために  
学生ボランティアと一緒に子どもが集える場を作る

岩手県陸前高田市で、ボランティアの窓口となる「陸前高田市復興サポートステーション」の運営、簡易宿泊所「二又復興交流センター」の指定管理と並んで、子どもたちの集いと交流の場「みちくさルーム」を運営しているパクト。子どもらしい日常を取り戻すための活動は、やがて被災地の復興を担っていく世代である子どもたちの心に、かけがえのない思い出を残すに違いない。

「子どもたちが遊べる場所がない」という  
保護者の声に応えるために活動を開始

東日本大震災によって、大切な人、もの、思い出を失った被災者たち。それは子どもたちにとっても同様であり、被災地のいたるところで、子どもたちは“居場所”を失った。通っていた学校は避難所となり、校庭には仮設住宅が建てられ、毎日のように遊んでいた公園は津波によってなくなり、近所の気軽に集まれる場所も減ってしまった。仲間との自由でのびのびとした交流を通じて成長していく子どもたちにとって、その場所も機会も奪われ、子どもらしい日常を失ったことは大きな痛手である。

陸前高田市のNPO法人「パクト」は、震災によって居場所を失った子どもたちが気軽に集える憩いの場、「みちくさルーム」の運営を2011年10月に開始した。「当時、避難所にいた保護者から、『子どもたちが集まれる場所がない』、『自分たちのことで忙しく、子どもたちをかまっていられない。ボランティアの方々と一緒に遊べるような場を作ってもらえないか』という声が出ました。確かに子どもたちの状況を見ても、エネルギーを発散できる場所がなく、ストレスがたまっている様子が見受けられました」と、子ども支援担当の古野安寿子さんは、みちくさルーム開設の経緯を語る。

現在、みちくさルームは市内の気仙町、広田町、矢作町、小友町の4カ所に開設され、各地区のコミュニティセンターや仮設住宅集会所で、土・日曜を中心に毎月2～

4回、各回2時間の定期的な活動を行っている。対象となるのは小学生だが、その兄弟姉妹と一緒に参加することもあるという。それぞれのみちくさルームには平均すると10名前後の子どもたちが参加し、体を動かす機会が



ボールを使った室内遊び



学生ボランティアによる絵本の読み聞かせ



市内の遊び場で思い切り遊ぶ子どもたち

減っていることから、ボール遊びのようなレクリエーション的な活動や、クリスマスや七夕などの季節の行事に合わせて、仲間と一緒に楽しめる工作などを主に行っている。このほかに、特別活動として年1回、遠足に出かけたり、不定期だが市内で行われるスポーツイベントなどに参加することもある。

学生ボランティアと触れ合う活動の中で  
震災の記憶を言語化し始めた子どもたち

みちくさルームの運営は、パクトのスタッフと聖心女子大学、神奈川大学、上智大学、岩手大学、東北大学、日本赤十字北海道看護大学の学生ボランティアが中心となって行っている。「学生ボランティアは、こちらにボランティアとしてやってきた方々の縁やツテで集まった方々です。それぞれのみちくさルームを決まった大学に担当してもらっているのですが、これは子どもたちにとって信頼関係が築きやすいからです。仮に顔ぶれが異なっても、同じ大学のお兄さん、お姉さんだと思えば、子どもたちも安心できます」と、古野さん。

みちくさルームの活動自体は2時間だが、活動に先立ち、スタッフとボランティアによる事前のオリエンテーションを2時間ほど行って当日の活動内容を確認し、活動後もやはり2時間近い振り返りの時間(反省会)を持つというから、ボランティア側の熱意も相当なものだ。「学生さんに現地に来ていただくことで、テレビなどで見聞き



特別活動として行う年1回の遠足にて

## 担当者より



従来の活動に加え  
プラスアルファの  
活動ができました

NPO法人 パクト  
子ども支援担当  
古野安寿子さん(左)  
萩原史さん(右)

活動を継続するなかで、資金確保が一番現実的な課題ですが、AJOSCから助成をいただいたおかげで、通常の活動の充実に加え、スポーツ系支援団体と「ボールであそぼ」というイベントを共催できたほか、協力大学との打ち合わせ、ボランティア同士の交流会などを実施できました。また、ボランティアの交通費の援助にも役立てることができました。

するのは違う現実を肌で感じてほしい、それを自分の身近なところで発信してほしい。震災から4年が経過して被災地に関する報道も少なくなってきましたので、それが震災の記憶の風化を防いだり、防災や減災への意識の高まりにつながれば幸いです」と、同じく子ども支援担当の萩原史さんは話す。

活動を始めてもうすぐ4年。最近、子どもたちの口から「震災のときのことを思い出した」という言葉がポロッとこぼれるという。「周囲の大人たちに気を使って我慢していたり、自分自身でも整理できないでいた気持ちが、学校の先生でも親でもないちょっと年上のお兄さん、お姉さんと触れ合うなかで、やっと言語化できるようになったのかもしれません。その距離感が、かえって子どもたちにとっては落ち着くのかも」と、古野さんと萩原さんは口をそろえる。

震災のことを振り返ることができるようになってきた分、それを今後の成長につなげていくために、より細かいフォローが必要だと思われる。このほかにもパクトでは子ども支援として、子どもや保護者に役立つ情報誌「たかたん」の制作・発行や、市内で活動する子ども支援団体の集まり「子ども支援ネットワーク会議」の運営なども行っている。